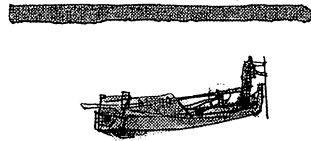


加藤辨三郎 述

浄土和讃

10

文責 本誌編集部



光を信ずる

いま述べている「浄土和讃」は、十二光のところです。

十二光は、無量寿佛、すなわち阿弥陀佛を光のみ佛として、その光が十二の名前がつけられ、そう呼ばれているのです。そのうちの無対光のところを、今回はもうしあげます。

清浄光明ならびなし

遇斯光のゆへなれば

一切の業繫ものぞこりぬ

畢竟依を帰命せよ

これが無対光といわれているお光です。もちろん阿弥陀佛の別号で、またその光の徳の内容も意味しているのでしょう。前にももうしたように、もともと『讃阿弥陀佛偈』という曇鸞大師の漢文の偈があり、それに十二光が全部うたわれています。無対光のところも、漢文ではつぎのようになっています。

清浄光明無有対（清浄の光明対あることなし）

故佛又号無対光（故に佛を又無対光と号す）

遇斯光者業繫除（斯の光に遇う者は業繫除する）

是故稽首畢竟依（是の故に畢竟依を稽首したてまつる）

この偈を、親鸞聖人はそのまま和文にお変えになった。

ですから「清浄光明ならびなし」の「ならびなし」が、原文では「対あることなし」です。これが無対です。無対光とは、並ぶものがないということで、相対ではない。AとBと比較して、AはBよりまさっているということではない。AもBもない。とにかくそのように比較するものはない。いわゆる絶対です。親鸞聖人は「絶対不二」という言葉を、よくお使いになります。『教行信証』では、「絶対不二の教」とか、「絶対不二の機」と使っていられます。この絶対不二は、比べるものがないのです。こうおおせになられるのは、親鸞聖人の非常に深い思索の結果、あるいはご体験からだろうと思うのです。おそらく、お念佛のなかへ何もかもふくまれる、あるいは比較を超えているというお気持ちがあったのではなからうかと思うのです。さて、ここに遇斯光の言葉が出ていますが、遇斯光という言葉は『大無量寿経』に載っています。この無対光に遇う者は、目で見て遇うのではなく、肌を感じるとか心に感ずる、もったいいえば、光を信じるということです。

それは太陽の光と同じで、太陽の光をわれわれは感じています。しかしその光そのものを見ることはできないはず。写真にとっても、影だけが映って、光そのものは映らない。影がさすから、そこに光があるんだと、われわれは承知するだけです。光は見る事ができないだけではない、耳にも聞こえませんが、舌でも味わえません。けれども全体で感じるでしょう。光を浴びればいい気持ちだし、自然にひなたぼっこをしたと思います。あれは光を信じている証拠です。光を信じているが、しかし、見ることも、聞くことも、さわることもできません。

業のつながり

佛の光も、われわれの肉眼で見るとか、この耳で聞くとかはできませんが、肌で感ずるとか、心に感ずるとか、確かにわれわれが経験しているところです。さればこそ南無阿弥陀佛とお称えもうしあげるのです。それは、目で見たからというわけではありません。そして理窟でわかったから信ずるのでもなく、もっと直接法的なのです。それこそ肌で感ずるのです。これも信心というよりほかないと思います。宗教的な言葉でいえば、信心ということしかないのです。

信心すなわち如来です。親鸞聖人は、大信心すなわち如来なりとおおせになつていきます。大信心は如来から賜った信心、そのものが如来だと、きわめて直接的です。これはもう悟りの境地です。しかし、わたしには悟りというより信心といったほうが、それを信じていることができるのです。

その遇斯光は難しい言葉が使つてあるが、この光に遇う者はと、わかりやすく説かれています。この光に遇うものは、業繋おのずから除かれる。おのずからという字はないが、これはおのずからです。だから阿弥陀佛を信じたてまつる者は業繋おのずから除かれるということなのです。

そこで、業繋ですが、これが大事なことだと思つています。第一、業が、わかつたようではわからない。たいへん難しい深いものなのです。また、繋というつながり、これも非常に大事なことです。わたくしどもは、業というとすぐ個人的な業、自分の宿業を感じるのです。しかし業は個人的なものだけだとはいえない。むしろ個人的な業をよくよく考えると個人的なものではなくて、宇宙全体とつながっているわけです。宇宙全体とつながると、話が哲学めいて、かえって難しく思われるでしょうが、さしずめわれわれの家族関係、あるいは親戚関係、友人関係といった身近

な人間関係をとつても、ともどもに業を背負っていて、しかもお互いに関連し合っています。この業のつながり、これがじつはわたくしたちを悩ませているものです。

佛教では、業について共業と不共業の二通りがあると説いています。共業とは字のとおりで、ともども背負っているところの業です。不共業とは、個人的な業です。わたしのよな業の深い者というが、それがその人の一種の深い人生観になつていふと思つています。親鸞聖人も「さればそくばくの業をもちける身にありけるを」といって、ご自身が限らない業を背負っていることをおっしゃっています。そして、ご自身の業の深さを痛感しておいになるのです。

善業も悪業もある

ですが、そればかりでなく、相ともに背負っているとこの業。お互い同士の業を背負っているのです。

数日前、アメリカでノーベル賞をもらった人の子種を、ある才媛の方がいただいて、そして人工授精をした。そして、それが無事に育つているということです。たまたまNHKで宗教番組の録画をしていたので、これをどう思いますかと質問が出ました。わたくしは思わず「また一つ大き

「な業を重ねましたな」と答えました。わたくしは真にそう
思っています。こういうような科学上の問題は、決して、
その人個人の問題ではなく、やっぱりわれわれも、ともど
もに関連していることなのです。けっしてAさんのBさ
んだけのことでなく、それはやがて、いろいろなこと
でわれわれにも影響をおよぼすのです。

この人工授精だって、天下一品の秀才ができるか、それ
は何ともいえません。不肖の子がたくさんありますからね。
しかし一応は数学的にいい人ができるとはいえるかもしれ
ませんが、偉い者ばかりできたら、どうなりますか。そ
のとき、またちょっと思いましたので、「一体、世の中
ほんとうにどっちが大事なのでしょうかね」といったので
す。偉い人が大事なのか、偉くない人が大事なのか。おれ
がおれがとって、みな偉い方が、他を引っ張ろうとなさ
る、それが世の中を幸せにしているのか。あるいは、わた
しのような者は何もできませんとっている者と、どっち
が世の中を幸せにしているかわかりません。この業繫は、
われわれが深く学ばなくてはなりません。

業繫の一番わかりいいのは家庭です。親があり、子があ
り、妻あり、夫あり、きょうだいありといった関係で、家

というものを、われわれはつくっておりますが、このお互
いが背負っているところの業、あれが業繫の最小限度といっ
ていいと思います。夫といても夫一人の業ではない。妻
とともに背負うところの業、これは顕著です。だからこそ、
いたわり合ったり、時には喧嘩もしましょうが、あれもみ
な業です。喧嘩も共業、つまり業繫なのです。仲よくする
のも業繫、いたわり合うのも業繫。業は悪いのばかりでは
ありません。善業もあれば悪業もある。この業繫で、われ
われは苦しみますれば喜びもしているわけです。喜んだり
悲しんだり、あざなえる縄のごとき人生、これをわれわれ

広島酒

酒王
牡丹
キクボタン

牡丹酒造株式会社
広島県賀茂郡河内町下河内153

も身をもつて感じているわけです。

念佛三昧

われわれが業のつながりで苦しんでいる。その業のつながりから起きるところのわれわれの悩みとか苦しみとか、遇斯光、つまりこの光に遇えば、おのずから除かれていくというのです。世間で代表的なのは嫁と姑。いつでも災いの例に出る。業繋の標本みたいなものです。それがもし、嫁も姑も、この光に遇うならば、この光を信ずるならば、つまり本願を信じ念佛をもうさば、業繋おのずから除かれるのです。嫁も姑もともに佛前で念佛を称える、心の底から念佛を称えることになれば、業繋は除かれるのです。もう一つ、三昧ということ。三昧もいろいろあるが、ほんとうに、どの修行も全部入って、これさえあれば全部それで満足させられる、そういう三昧は、念佛三昧である『教行信証』に説かれています。その三昧こそが、絶対無二の三昧であるという例があげられています。

たとえば貪欲は除くが、いかりとか愚痴は除くことができない、そういう三昧もあるという。また、いかりの心は除くけれども、貪欲と愚痴は除かれない、それから、愚痴

のほうは除くが、貪欲といかりのほうは除かれない、そういう三昧がある。また、現在の業繋を除くことはできないが、過去と未来はできない、あるいはまた過去はできても、現在と未来はできない、あるいは未来はできても、現在と過去はできない。ところが、どれもこれも一切の業繋を除かれるのは、念佛三昧であると説かれています。

佛教では、この貪瞋痴は常に説かれています。わたしたちは煩惱、煩惱というが、一番根本をなしているのは、貪欲といかりと愚痴であって、そこからさまざまの煩惱が派生し、それでわれわれが悩んでいることは、お釈迦さま以来説かれて、われわれは苦しいとか、悩むとか、つらいつらいといっている。けれども、よくよく考えてみると、自分自身の貪瞋痴がしからしめている。愚痴とは、元来は本当のことがわからないことです。真理がわからないのです。それで愚痴る。ねたんだり、そねんだりする。貪欲とは、欲望ですが、欲望は五欲といい、性欲・食欲・名誉欲・それから眠りの欲・そして一番の欲といわれるのが、愛欲です。これらが、なかなか捨てられなく、われわれの悩み、苦しみの根源であると説かれています。

(前在家佛教協合理事長・元協和醗酵工業社長)